

2023～2024年シーズン 鳥インフルエンザのサーベイランス の結果・発生状況

2025年1月

環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室

2023～2024年シーズンの 高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）発生状況（概要）

○発生件数（2023年10月～2024年4月）

- ・野鳥：1都1道1府25県、156事例（うち環境試料14事例）
- ・飼養鳥：2県、2事例
- ・家きん：10県、11事例

○高病原性鳥インフルエンザウイルス（HPAIV）の亜型（事例数）

- ・H5N1亜型（126）
- ・H5N5亜型（32）
- ・H5N6亜型（1）

○初発：10月4日回収のハシブトガラス（北海道美唄市）

○最終確認：4月30日回収のハシブトガラス（北海道札幌市）

○多発種：ハシブトガラス（9道府県、67事例）

○希少種の発生状況（事例数）

- ・国内希少野生動植物種：オジロワシ（4）、クマタカ（3）、ハヤブサ（4）、タンチョウ（4）
- ・絶滅危惧種*：ナベヅル（5）、マナヅル（3）

○初確認種：ツミ及びハマシギ（各1事例）

○哺乳類の発生状況：確認事例なし

*絶滅危惧IA類、IB類、II類（環境省レッドリスト2020）に分類されている種のうち、国内希少野生動植物種をのぞく。

2023～2024年シーズンのウイルス保有状況調査

- 都道府県等の協力の下、環境省が実施した死亡野鳥等のウイルス保有状況調査において、HPAIVを103事例、低病原性鳥インフルエンザウイルス（LPAIV）を1事例で確認した。
- その他大学等の独自調査により、HPAIVを55事例（野鳥糞便 5事例、環境水 8事例、死亡野鳥等41事例（飼養鳥2事例含む）、ハエ1事例）で確認した。
- 合計で、野鳥（環境試料含む）では156事例、飼養鳥では2事例でHPAIVを確認した。

ウイルス保有状況調査総括表(過去5年間)

調査年 (月)		2019-2020 (10-9月)	2020-2021 (10-9月)	2021-2022 (10-8月)	2022-2023 (9-5月)	2023-2024 (9-6月)
定期糞便採取調査	検査総数 ^{※1}	6,072	10,985	8,801	5,817	
	HPAI	0	2	0	1	実施なし
	LPAI (分離株数)	13 (14)	27(28)	41(41)	12(11)	
発生時追加糞便	検査総数	0	600	260	0	
	HPAI	0	0	0	0	実施なし
	LPAI (分離株数)	0	0	4(4)	0	
環境試料 (水)	検査総数	14	13	5	7	
	HPAI	0	1	0	0	実施なし
	LPAI	0	0	0	0	
死亡野鳥等調査	検査総数 ^{※1}	333	1,322	946	1,182	898
	HPAI	0	31	97	150 ^{※2}	103
	LPAI	0	1	2	2	1
大学や都道府県による独自調査			環境試料 ^{※3}			
	HPAI		24	8	11	14
			死亡野鳥		1	90
			飼養鳥			2
その他 (死亡野鳥) ^{※4}	HPAI			1	3 ^{※5}	
HPAI陽性総数		0	58	107	252	158

※1：国立環境研究所で検査を実施した糞便個数・死亡野鳥等件数。死亡野鳥等については、一部自治体では、別途、検査を実施している。

※2：飼養鳥10事例を含む ※3：野鳥糞便、環境水、ハエを含む ※4：農林水産省疫学調査チームによる回収個体

※5：大学や都道府県による独自調査と重複

2023～2024年シーズンの検査実施状況 @国環研（死亡・衰弱野鳥）

- 国立環境研究所（国環研）では、2023年9月～2024年6月までに、計898件の死亡野鳥等の検査を実施。
- 検査数が最も多かったのは12月（171件）、次いで11月（167件）であった。
- 他方、検査したうち陽性となった検体の割合が最も高かったのは2月（40/113検体）であった。
- 本シーズンより設定された早期警戒期間（9～10月）中の検査数は計75件で、7件の陽性事例を確認した。

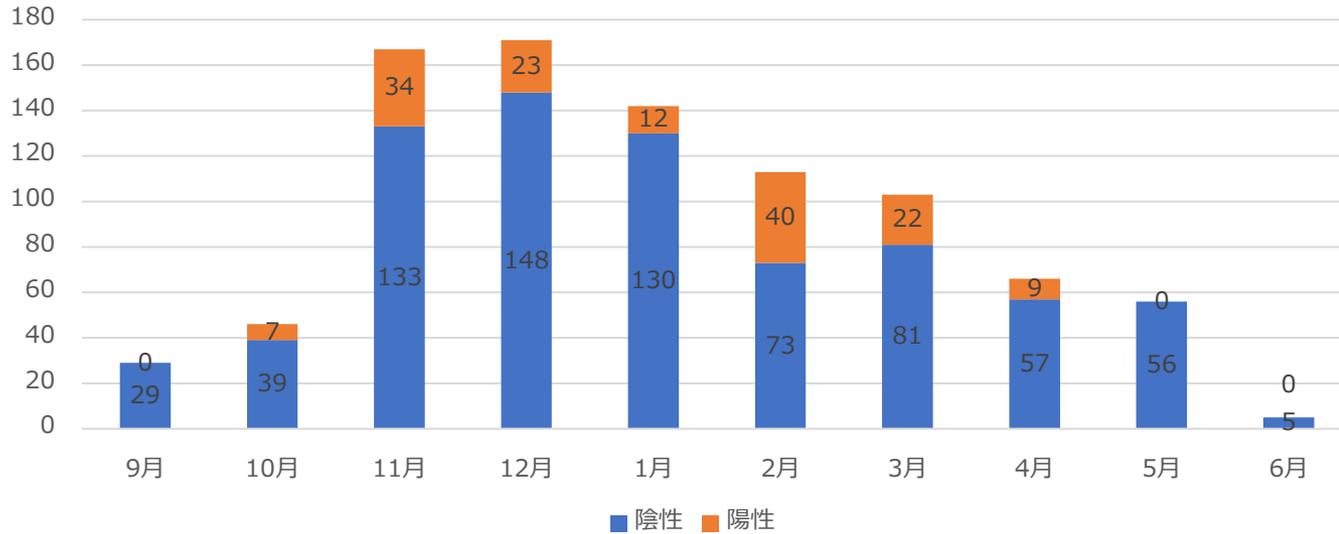
都道府県別死亡野鳥サンプル受入状況（受入日でカウント）

	2023年 9月	2023年 10月	2023年 11月	2023年 12月	2024年 1月	2024年 2月	2024年 3月	2024年 4月	2024年 5月	2024年 6月
北海道	8	19	57	41	23	17	26	27	13	5
青森県	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
岩手県	0	0	6	11	6	11	23	1	2	0
宮城県	0	1	6	4	0	0	1	0	0	0
秋田県	0	1	0	0	0	0	3	0	2	0
山形県	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
福島県	0	1	1	6	1	1	2	0	0	0
茨城県	0	2	0	16	6	4	2	0	1	0
栃木県	0	0	2	0	1	8	0	11	0	0
群馬県	0	0	22	4	2	0	1	0	0	0
埼玉県	1	0	0	6	1	1	0	1	0	0
千葉県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
東京都	0	0	2	2	0	1	0	0	0	0
神奈川	1	1	0	3	2	0	0	4	0	0
新潟県	0	0	2	8	9	4	5	1	3	0
富山県	1	0	6	1	1	1	0	0	0	0
石川県	4	0	0	0	1	5	0	0	0	0
福井県	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0
山梨県	0	0	2	0	2	2	0	1	3	0
長野県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
岐阜県	0	0	0	1	2	0	1	0	0	0
静岡県	0	0	1	6	3	1	0	0	0	0
愛知県	0	0	0	7	1	3	0	2	1	0
三重県	0	1	0	1	0	1	0	1	0	0

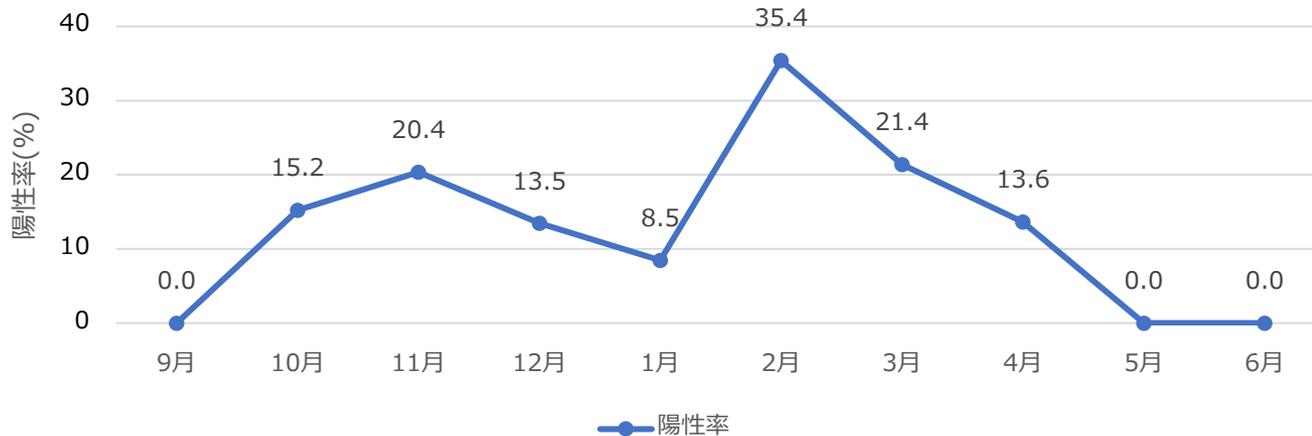
	2023年 9月	2023年 10月	2023年 11月	2023年 12月	2024年 1月	2024年 2月	2024年 3月	2024年 4月	2024年 5月	2024年 6月
滋賀県	0	0	0	0	2	0	1	0	0	0
京都府	0	0	3	4	0	1	2	0	0	0
大阪府	0	6	1	1	17	29	12	0	22	0
兵庫県	0	0	2	2	3	0	1	0	3	0
奈良県	0	1	1	2	0	1	6	1	0	0
和歌山	6	1	0	1	2	0	0	0	8	0
鳥取県	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
島根県	0	1	3	1	1	1	0	0	0	0
岡山県	0	1	7	6	2	0	0	7	0	0
広島県	0	0	0	3	0	4	6	4	0	0
山口県	0	0	1	1	1	1	1	0	0	0
徳島県	0	0	4	7	4	5	5	1	0	0
香川県	0	0	3	4	3	3	2	7	0	0
愛媛県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高知県	0	0	2	3	4	3	0	1	0	0
福岡県	0	0	0	5	1	0	2	1	3	0
佐賀県	0	1	1	10	0	0	0	0	0	0
長崎県	0	0	4	6	10	0	0	0	3	0
熊本県	0	0	5	4	8	2	0	0	0	0
大分県	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
宮崎県	0	0	2	10	11	3	0	0	0	0
鹿児島	0	0	3	2	2	2	1	0	0	0
沖縄県	2	3	0	0	0	0	0	1	0	0

2023～2024年シーズンの検査実施状況 @国環研（死亡・衰弱野鳥）

月別の検査件数



陽性率

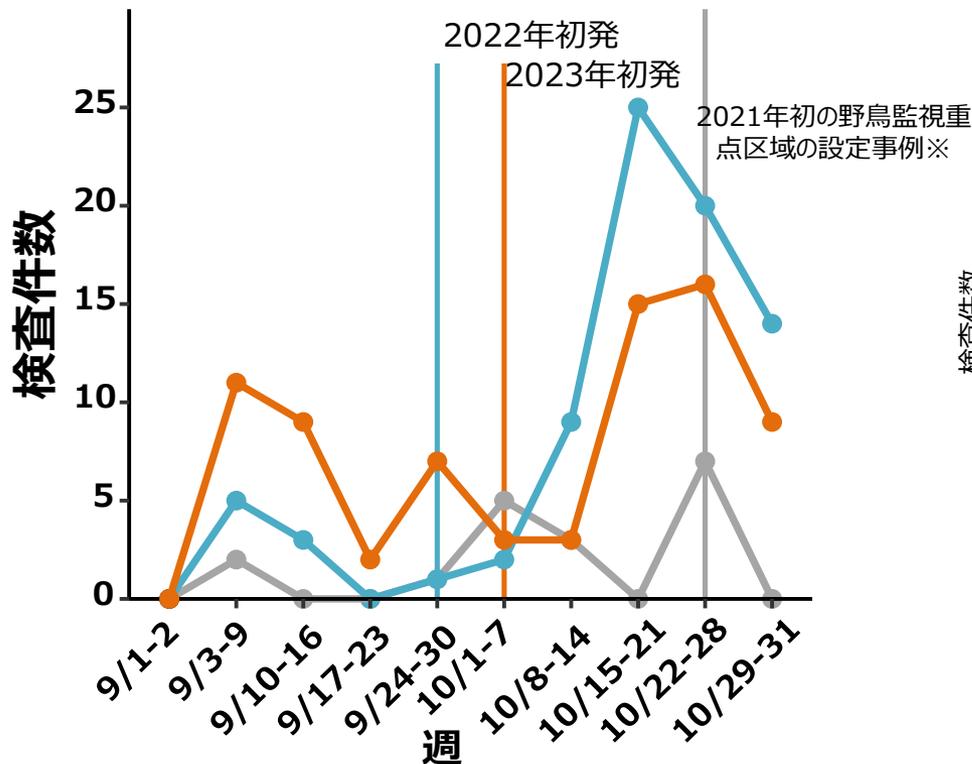


過去3シーズン（9～10月）の検査実施状況 @国環研（死亡・衰弱野鳥）

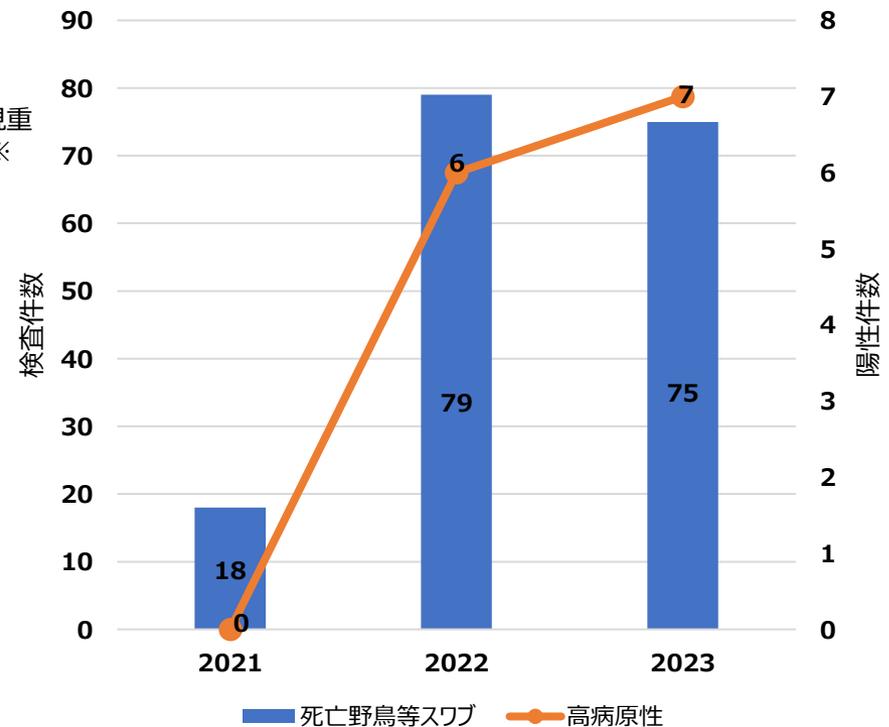
- 早期警戒期間を設定していない2022～2023年シーズンは、シーズン初発以降に検査件数が急増
- 早期警戒期間を開始した2023～2024年シーズンは、前シーズンと比べて初発の前に実施された検査件数が多い。
- 9～10月中の検査実施数自体は2022～2023年シーズンと2023～2024年シーズンに大きな違いはない。
⇒早期警戒期間を開始した2023～2024年シーズンは前シーズンと比べて、ウイルス侵入の早期把握のために、より多くの努力量が費やされた。

死亡野鳥等の週別検査件数

● 2021 ● 2022 ● 2023



年別検査件数・陽性件数



※ 簡易検査陽性となり、シーズンで初めて野鳥監視重点区域が設定された事例（その後の検査で低病原性と判明）

2023～2024年シーズンのHPAI発生状況

野鳥・環境試料・飼養鳥・家きん

2023年10月から2024年4月までの発生状況（全国）

- 野鳥・環境試料：1都1道1府25県、156事例
- 飼養鳥：2県、2事例
- 家きん：10県、11事例

- 野鳥
- 環境試料
- 飼養鳥
- 家きん

- ・水鳥類、カラス類、猛禽類のいずれも広い範囲で陽性事例が確認された。
- ・カラス類（主にハシブトガラス）では、同一地域内での続発事例が複数事例確認された。

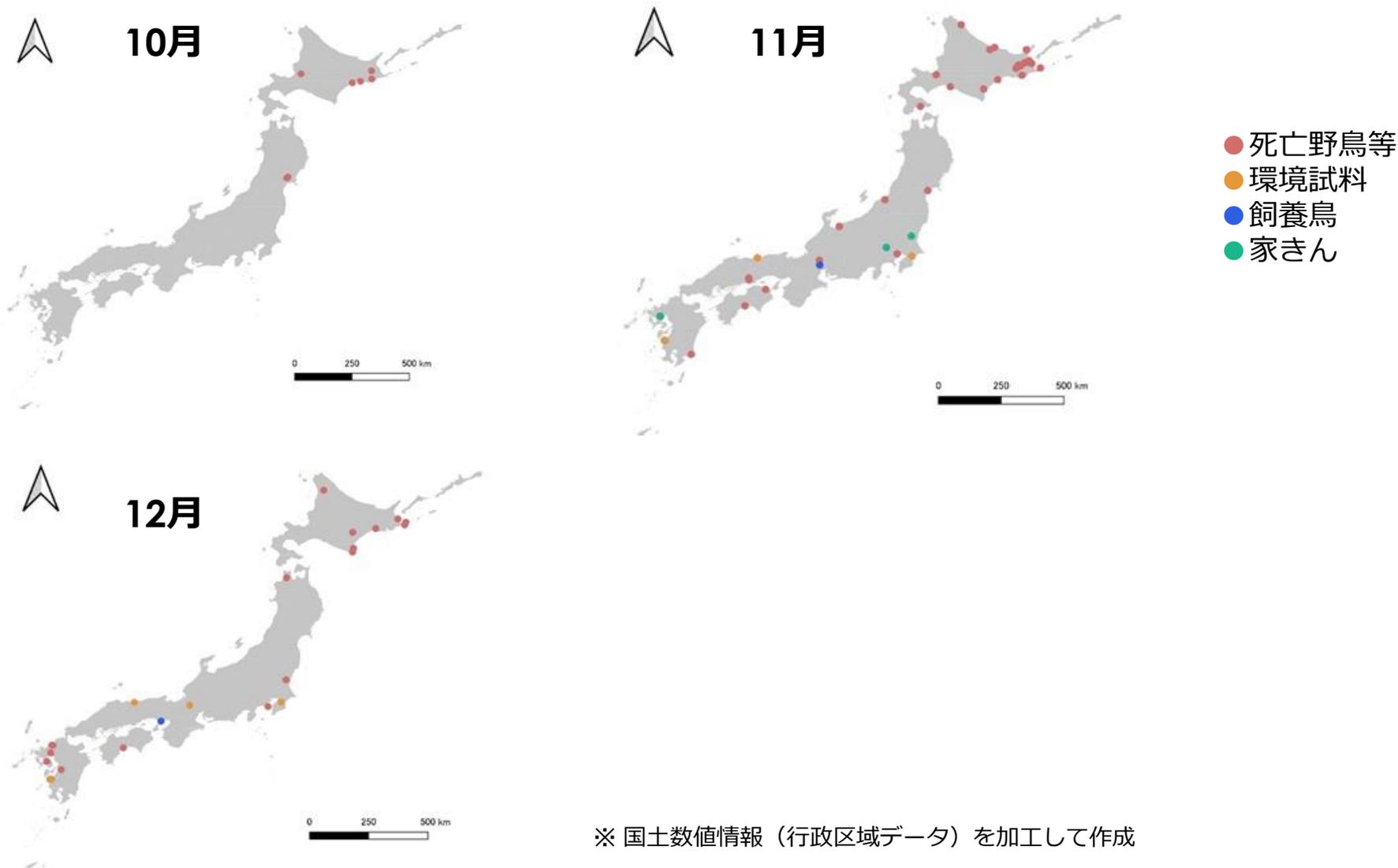
野鳥（水鳥類・カラス類・猛禽類）

- カラス類
- 水鳥類
- 猛禽類

2023～2024年シーズンのHPAI発生状況

2023年10月～12月までの発生状況（累積）

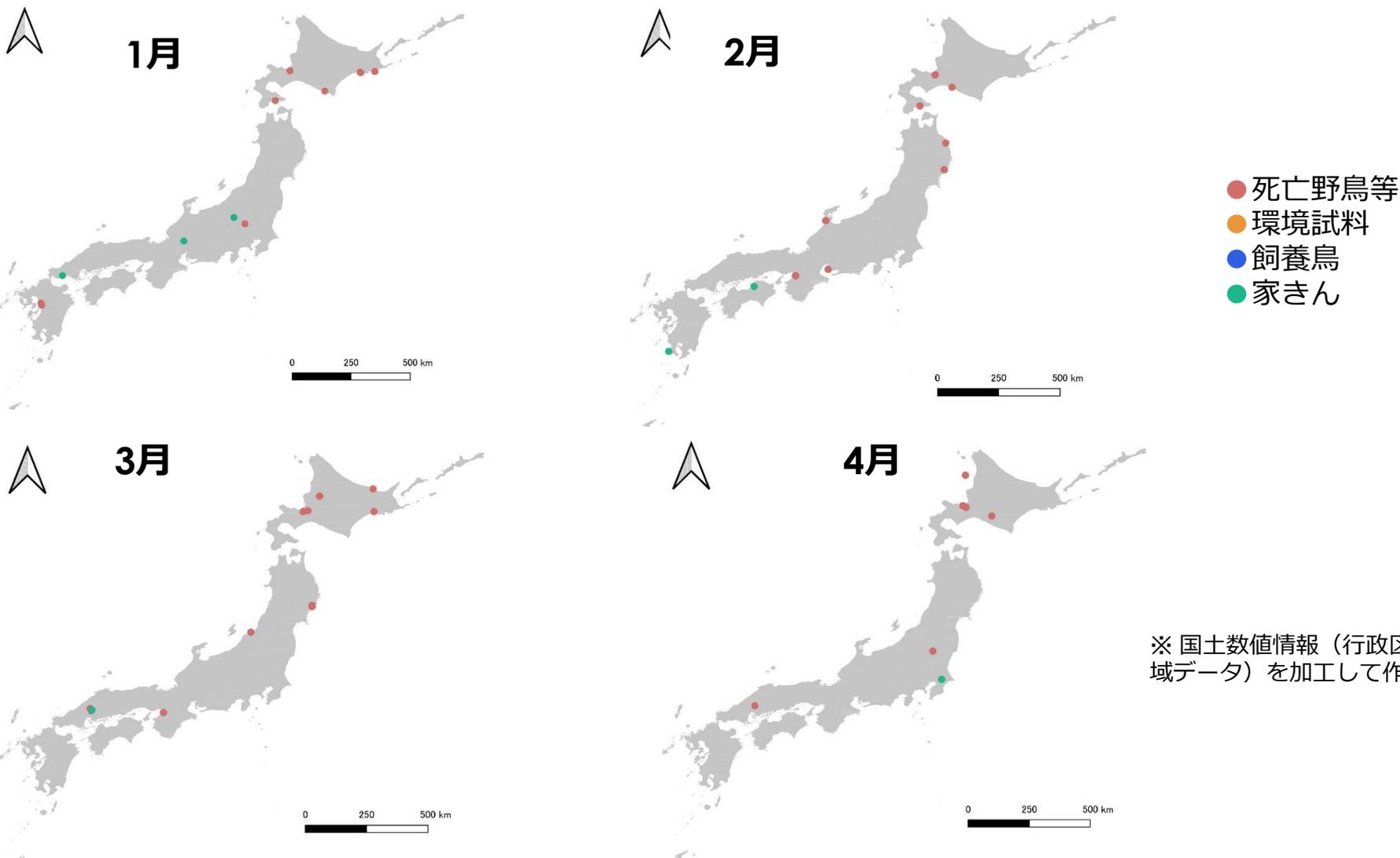
- ・ シーズン初のHPAI陽性事例は、10月4日に北海道美唄市で回収されたハシブトガラス



2023～2024年シーズンのHPAI発生状況

2024年1月～4月までの発生状況（累積）

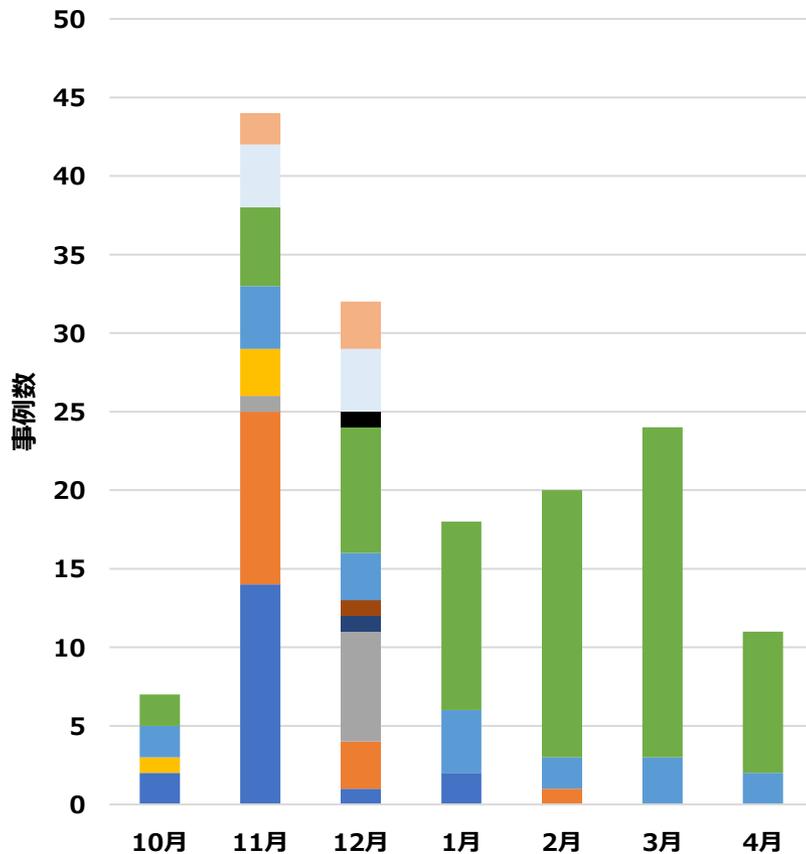
- ・ シーズン最後のHPAI陽性事例は、4月30日に北海道美幌市で回収されたハシブトガラス



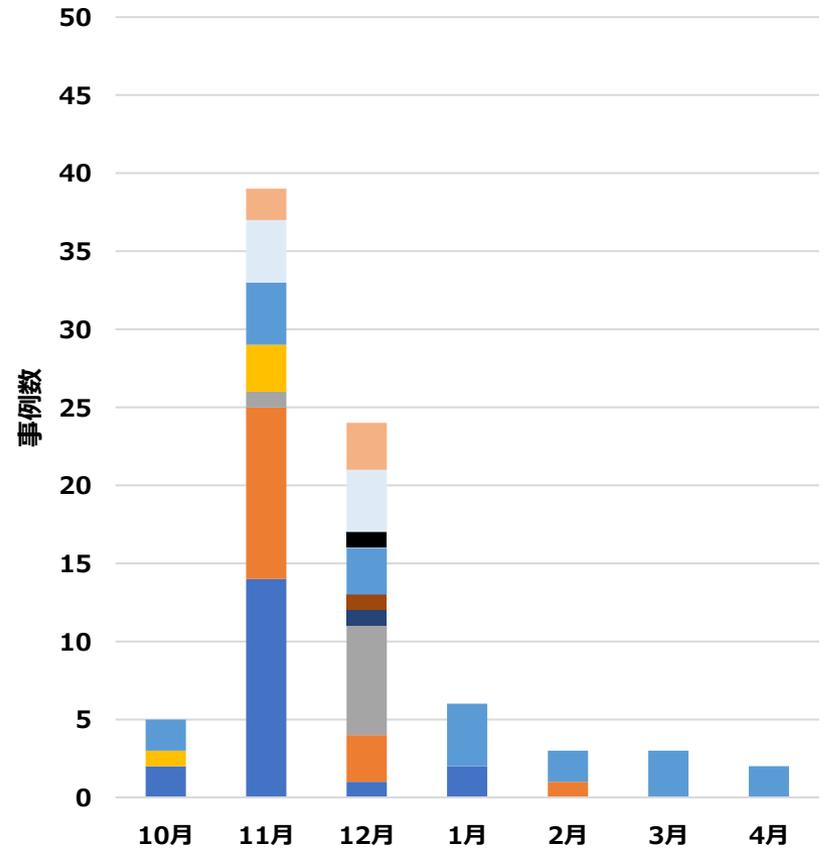
2023～2024年シーズンのHPAI発生状況 (死亡野鳥等・野鳥糞便・環境試料/月別の事例数)

- 前シーズンと同様に秋（11月44事例）と春（3月24事例）に2つのピークがあった。
- 主に水鳥類が秋のピーク（29/44事例）を、カラス類が春のピーク（21/24事例）を構成。

月別事例数



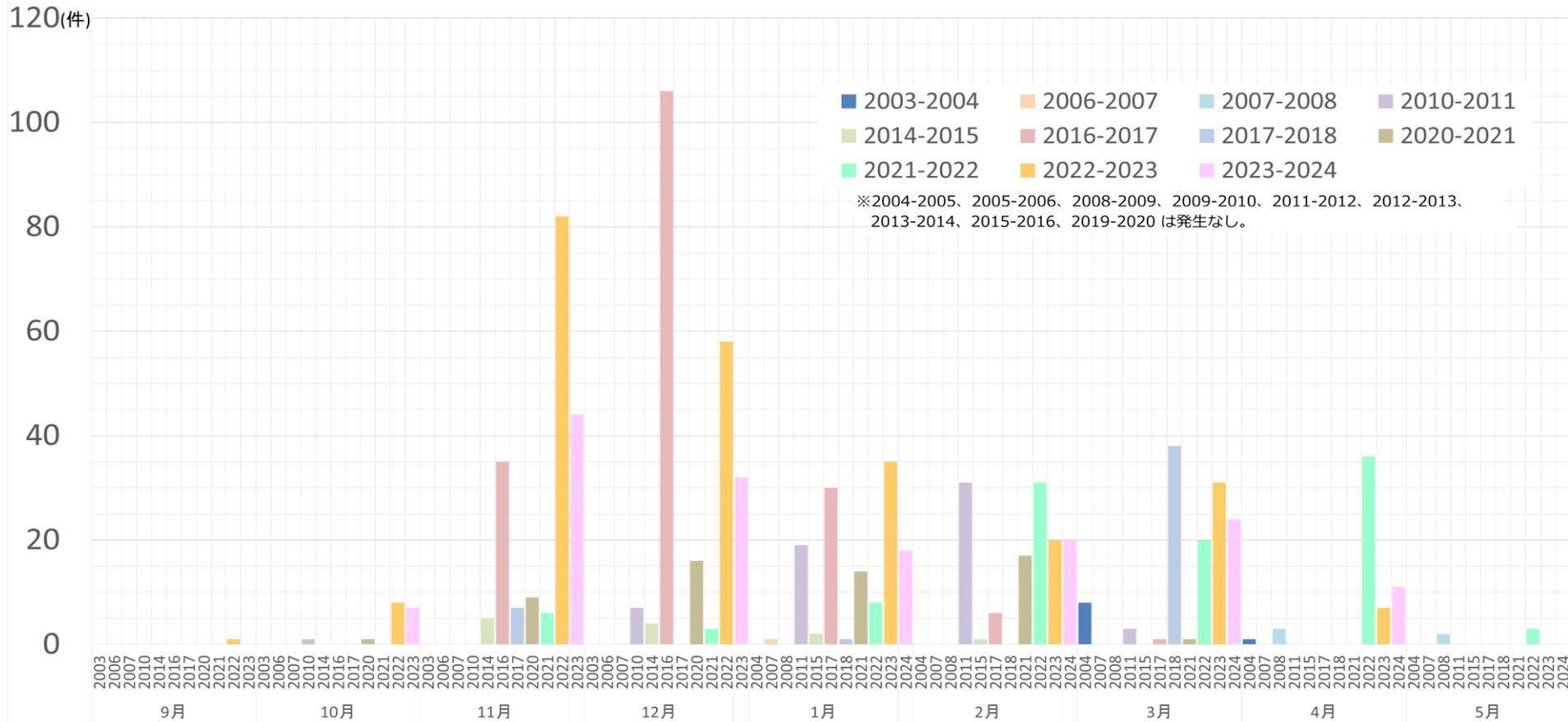
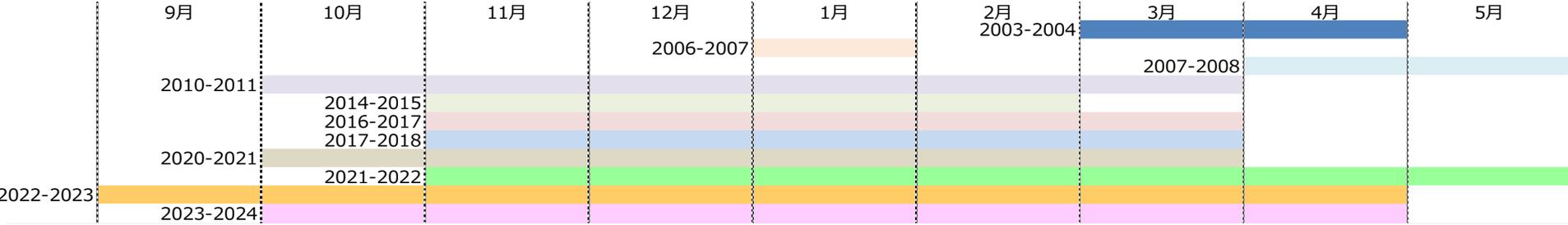
月別事例数(カラス類を除く)



■ ハクチョウ類 ■ カモ類 ■ ツル類 ■ タンチョウ ■ カモメ類 ■ その他水鳥類 ■ 猛禽類 ■ カラス類
■ 環境試料(水) ■ 環境試料(八工) ■ 野鳥糞便

2023～2024年シーズンのHPAI発生状況 (月別の事例数/過去シーズンとの比較)

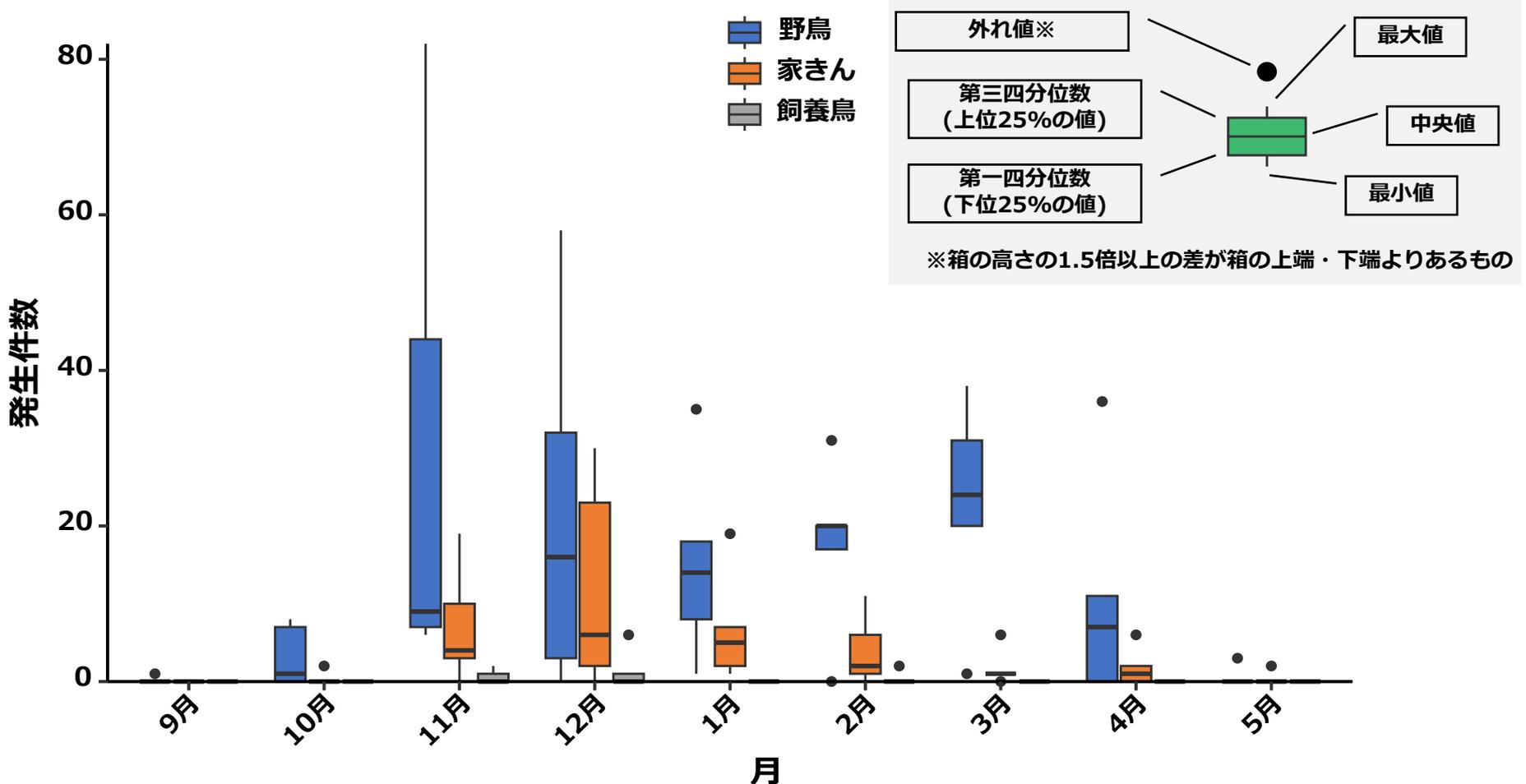
高病原性鳥インフルエンザウイルス陽性事例数の月別推移 (野鳥における発生状況)



2023～2024年シーズンのHPAI発生状況 (月別の事例数/直近5シーズンの傾向)

・HPAI発生があった直近5シーズンの発生件数は、野鳥は秋から冬と春の2つのピークが存在し、家きんでは冬にピークが存在。

直近5シーズンの月別発生件数



2023～2024年シーズンのHPAI発生状況 (種別の検査件数・陽性件数)

国立環境研究所で受け入れ・検査した検体（死亡野鳥・衰弱野鳥・哺乳類）

水鳥類			水鳥類（つづき）			その他の鳥類		
種名	検査件数	陽性件数	種名	検査件数	陽性件数	種名	検査件数	陽性件数
マガン	2	0	カワウ	8	0	アオゲラ	1	0
コブハクチョウ	5	0	トキ	5	0	ヒレンジャク	10	0
コハクチョウ	20	1	コクチョウ	1	0	シジュウカラ	1	0
オオハクチョウ	90	18	猛禽類			ヒヨドリ	3	0
ハクチョウ	5	1	種名	検査件数	陽性件数	メジロ	10	0
オシドリ	15	0	ミサゴ	1	0	ムクドリ	7	0
トモエガモ	10	0	カンムリワシ	1	0	ムクドリ・ホシムクドリ	1	0
ヒドリガモ	26	6	クマタカ	8	3	シロハラ	6	0
カルガモ	3	0	ツミ	2	1	ツグミ	6	0
マガモ	72	0	ハイタカ	5	0	スズメ	15	0
オナガガモ	28	2	オオタカ	24	2	シメ	4	0
コガモ	1	0	トビ	2	0	イカル	6	0
ホシハジロ	28	1	オオワシ	13	0	カワラヒワ	5	0
キンクロハジロ	6	1	オジロワシ	36	4	カワラバト(ドバト)	14	0
スズガモ	12	0	ノスリ	24	4	ソウシチョウ	1	0
タンチョウ	32	4	トラフズク	1	0			
カイツブリ	3	0	シマフクロウ	1	0			
カンムリカイツブリ	18	0	フクロウ	42	2			
ハマシギ	1	1	ハヤブサ	20	4			
アカエリヒレアシシギ	9	0	カラス類			哺乳類		
ウミネコ	2	0	種名	検査件数	陽性件数	種名	検査件数	陽性件数
セグロカモメ	1	1	カケス	1	1	イリオモテヤマネコ	1	0
コシジロウミツバメ	3	0	オナガ	5	0			
オーストンウミツバメ	5	0	ハシボソガラス	26	4			
コウノトリ	3	0	ハシブトガラス	163	78			
ウミウ	1	0	カラス	17	2			

※鳥種の記載順は、
日本鳥類目録第8版リストによる。

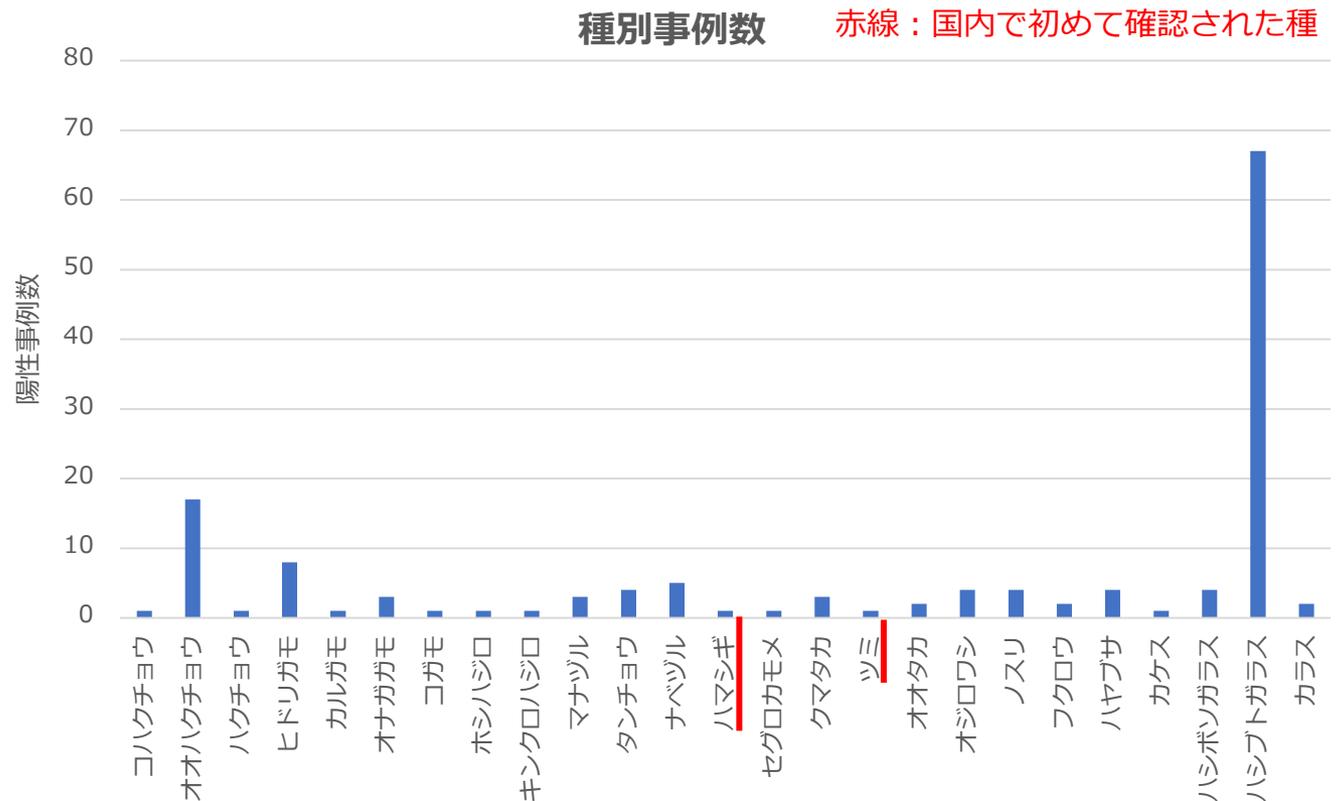
2023～2024年シーズンのHPAI発生状況（鳥種別事例数）

水鳥類	
種名	陽性事例数
コハクチョウ	1
オオハクチョウ	17
ハクチョウ	1
ヒドリガモ	8
カルガモ	1
オナガガモ	3
コガモ	1
ホシハジロ	1
キンクロハジロ	1
マナヅル	3
タンチョウ	4
ナベヅル	5
<u>ハマシギ</u>	1
セグロカモメ	1
計	48

カラス類	
種名	陽性事例数
カケス	1
ハシボソガラス	4
ハシブトガラス	67
カラス	2
計	74

- 25種の鳥類で計142事例（水鳥類48事例、猛禽類20事例、カラス類74事例）のHPAIV感染が確認された。
- 陽性事例数はハシブトガラスで最も多く、9道府県で67事例265羽を確認

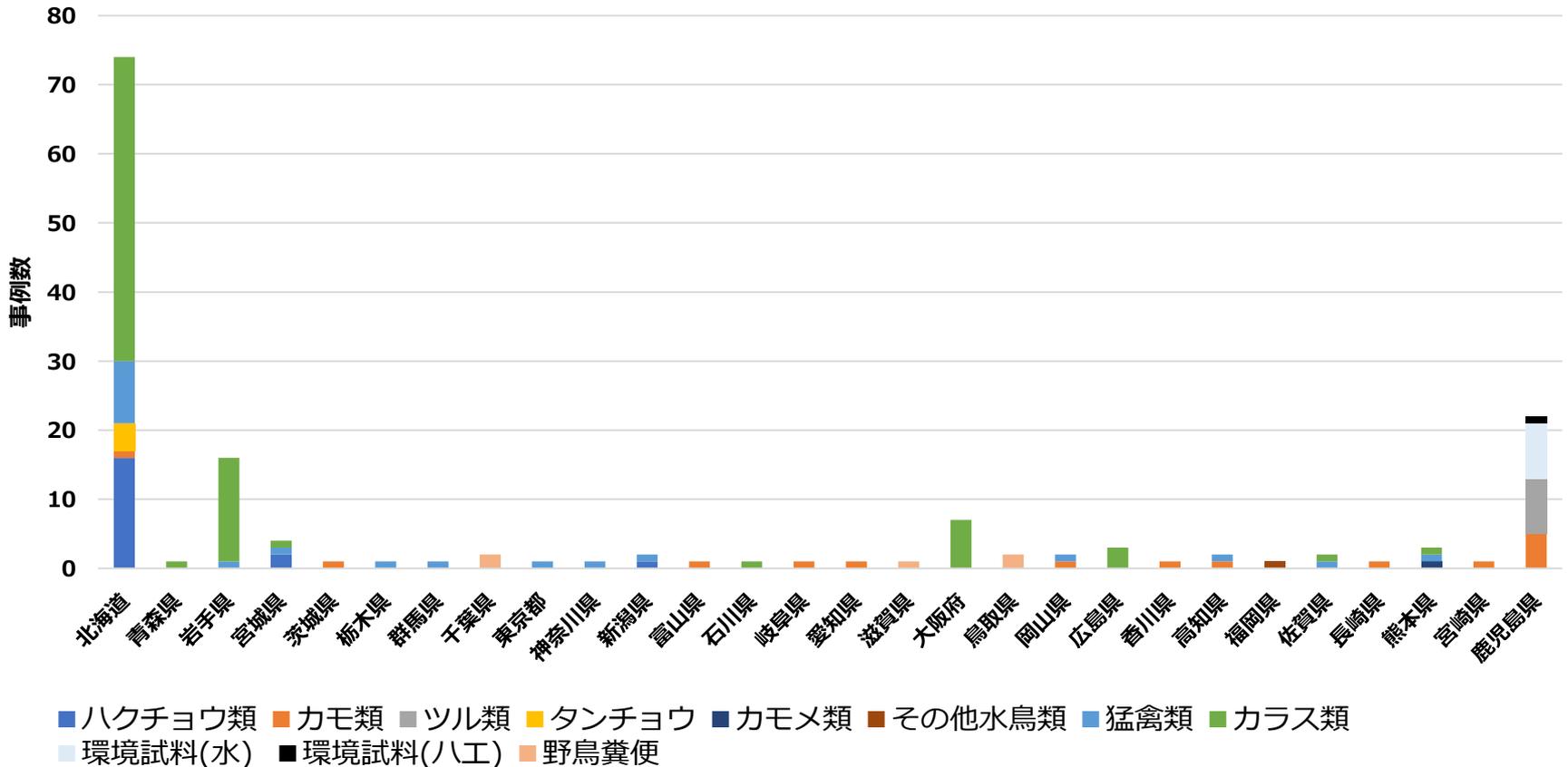
猛禽類	
種名	陽性事例数
クマタカ	3
<u>ツミ</u>	1
オオタカ	2
オジロワシ	4
ノスリ	4
フクロウ	2
ハヤブサ	4
計	20



2023～2024年シーズンのHPAI発生状況（都道府県・野鳥）

- 野鳥（環境試料含む）の陽性事例は1都1道1府25県、156事例
- 北海道で最多の74事例を確認：すべて死亡・衰弱野鳥（うち、ハシブトガラス39事例、ハシボソガラス2事例、カラス（種不明）2事例）

都道府県別事例数



※ 大阪府、兵庫県では、感染した野鳥に接触した飼養鳥が感染

2023～2024年シーズンのHPAI発生都道府県等による 注意喚起の実施状況

- 野鳥又は家きんにおけるHPAIが確認された都道府県による報告（計85件）に基づき、以下及び次頁のとおり「餌付けや給餌」、「放し飼い」、「周辺住民等」及び「狩猟者等」に対する注意喚起の実施状況を整理した。

<餌付けや給餌に対する注意喚起等の対応>

餌付けや給餌への対応状況	件数	対応の内容
情報無し（※）	38	公的給餌事業への対応（道県による対応）
該当事例の確認なし	25	給餌の際の注意事項の周知、死亡・衰弱個体の早期発見の依頼（出水市ツル類、北海道タンチョウ）
実施	22	
計	85	組織や個人による餌やりへの対応（道県による対応）
		公園管理者に対する注意喚起（看板設置や消毒槽の設置期間の延長依等）
		個人に対する注意喚起（通報、現地確認に基づく）
		環境省施設における状況に関する情報収集（浜頓別クッチャロ湖水鳥観察館）
		組織や個人による餌やりへの対応（市町村による対応）
		水鳥が飛来する湖沼等における看板（給餌禁止）の設置
		個人に対する注意喚起（通報に基づく）
		鳥類飼養施設への対応（道による対応）
		各施設における鳥インフルエンザに関する体制の確認と注意喚起

<放し飼いに対する注意喚起等の対応>

放し飼いへの対応状況	件数	対応の内容
情報無し（※）	44	組織や個人による放し飼いへの対応（県による対応）
該当事例の確認なし	40	公園管理者に対する注意喚起（放し飼いの中止依頼）
実施	1	
計	85	

※ 調査票への記載なし、または注意喚起の調査票なし

2023～2024年シーズンのHPAI発生都道府県等による 注意喚起の実施状況（つづき）

<周辺住民等に対する注意喚起等の対応>

周辺住民等への対応状況	件数	
情報無し（※）	19	
実施せず（※※）	8	※ 調査票への記載なし、または注意喚起の調査票なし
実施	58	※※ 「なし」「実施なし」「該当なし」「周辺に住民はいない」と回答のあったもの
計	85	

都道府県による注意喚起等の対応	
方法	内容
<ul style="list-style-type: none"> ・市町村への情報提供、注意喚起、死亡野鳥発見時や周辺住民への対応依頼など（メール、通知等） ・ホームページへの掲載 ・発生地点周辺住民への直接の注意喚起 ・相談窓口の設置 ・報道（テレビ、新聞）による情報発信 ・スマートフォン・タブレットアプリ（JC-Smart）、ハイブリッドキャストを活用した情報発信 	<ul style="list-style-type: none"> ・鳥インフルエンザについて ・発生状況（野鳥監視重点区域の設置状況） ・検査の実施状況と結果 ・感染対策（手洗い、うがい、消毒など） ・野鳥との接し方について ・死亡野鳥発見時の対応について（通報依頼）

市町村による注意喚起等の対応	
方法	内容
<ul style="list-style-type: none"> ・ホームページへの掲載 ・水鳥が飛来する湖沼等における看板の設置 ・市教育課から小中学校への注意喚起 ・防災メールや情報防災無線を用いた注意喚起 	上記に同じ

2023～2024年シーズンのHPAI発生都道府県等による 注意喚起の実施状況（つづき）

<狩猟者に対する注意喚起等の対応>

狩猟者への対応状況	件数
情報無し（※）	25
実施せず（※※）	9
実施	51
計	85

※ 調査票への記載なし、または注意喚起の調査票なし
 ※※ 「なし」「実施なし」「未実施」等と回答のあったもの

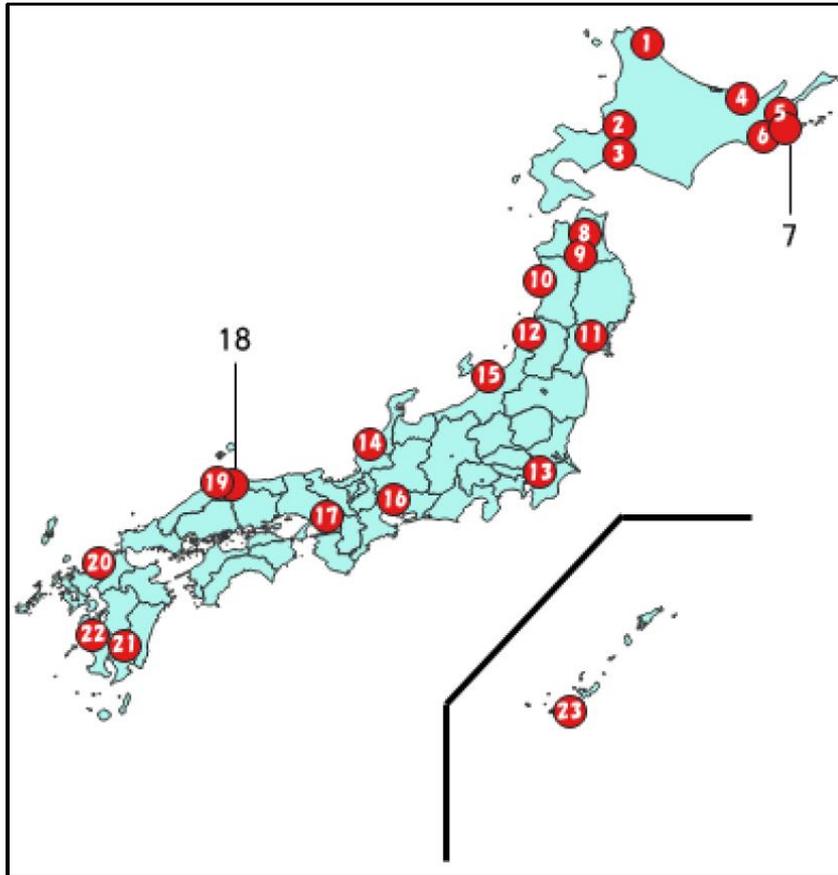
都道府県による注意喚起等の対応	
方法	内容
<ul style="list-style-type: none"> ・ 猟友会を通じて通知（メール等） ・ 狩猟者向けチラシの配布（狩猟者登録時） ・ ホームページへの掲載 ・ 記者配布 ・ 相談窓口の設置 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 情報共有 ・ 狩猟自粛依頼（野鳥監視重点区域内又は発生市町村及びその周辺） ・ 野鳥の扱いや感染対策 ・ 適切な消毒方法の周知 ・ 大量死等異常の確認時の通報

2023～2024年シーズンの渡り鳥の状況

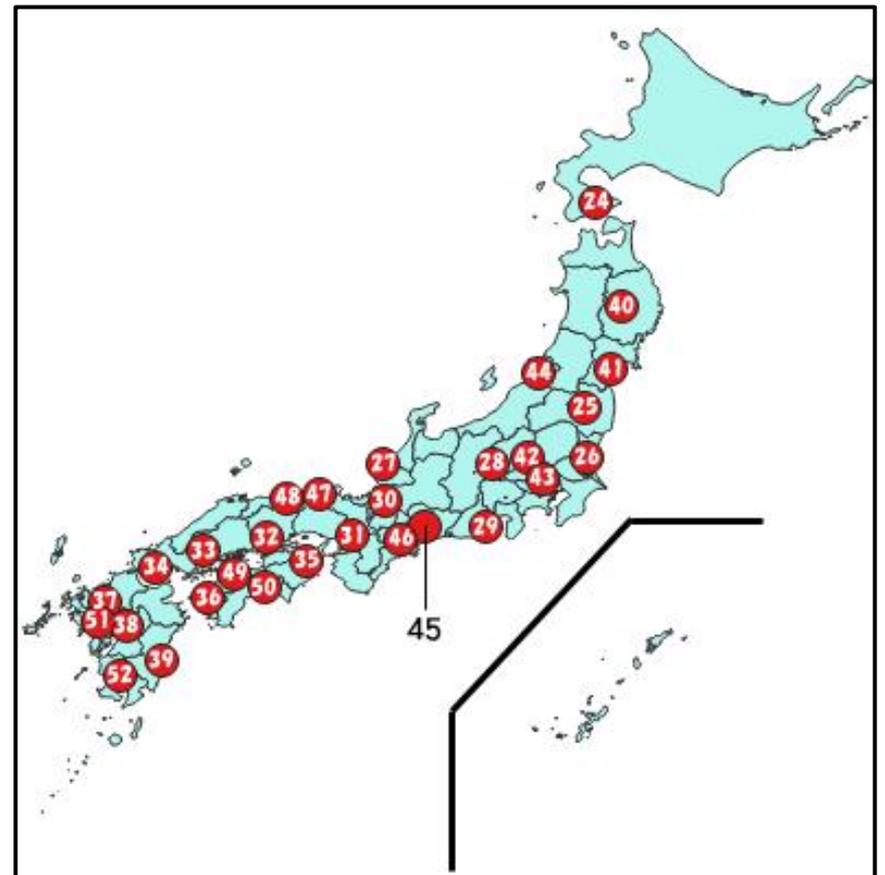
渡り鳥飛来情報収集調査（全体的な傾向）

- 全国52か所で9月から5月（一部は10月から3月）にかけて、月2～3回、渡り鳥の種と個体数を把握するための調査を実施した。
- 研究活動への活用も想定し、知見を蓄積している。

9月から5月まで月3回調査を実施している地点



10月から3月まで月2回調査を実施している地点



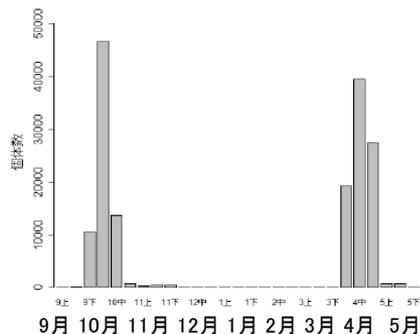
2023~2024年シーズンの渡り鳥の状況

ガンカモ類の主要な渡来地における飛来状況

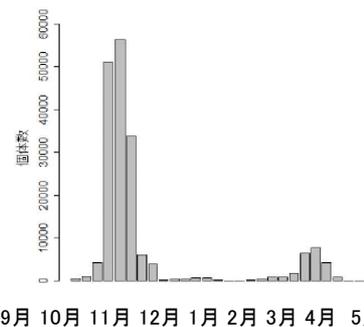
ガン・カモ類の飛来数合計

- 結氷する北海道では秋と春の双極性のピークが出現した。
- 本州以南では12月前後にピークが出現した。

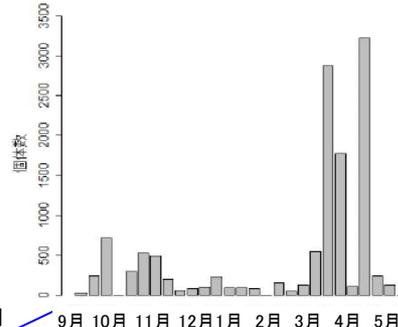
(2) 宮島沼



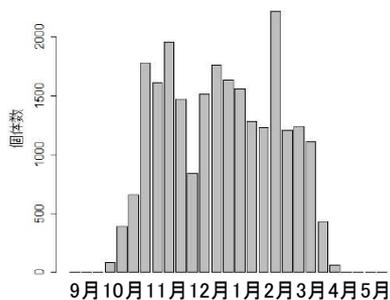
(1) 浜頓別クッチャロ湖



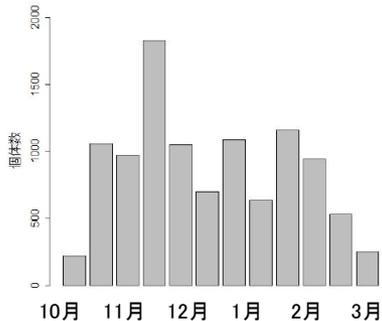
(4) 澁湖



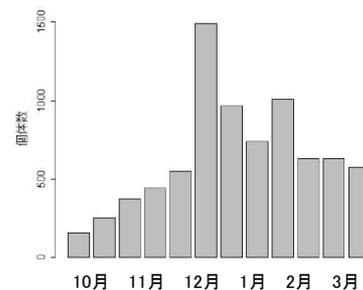
(22) 出水・高尾野



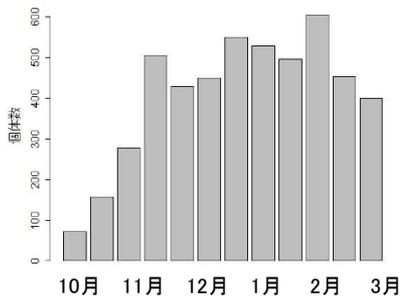
(52) 鹿児島湾奥部



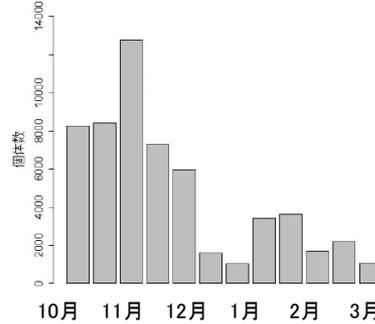
(40) 高松の池



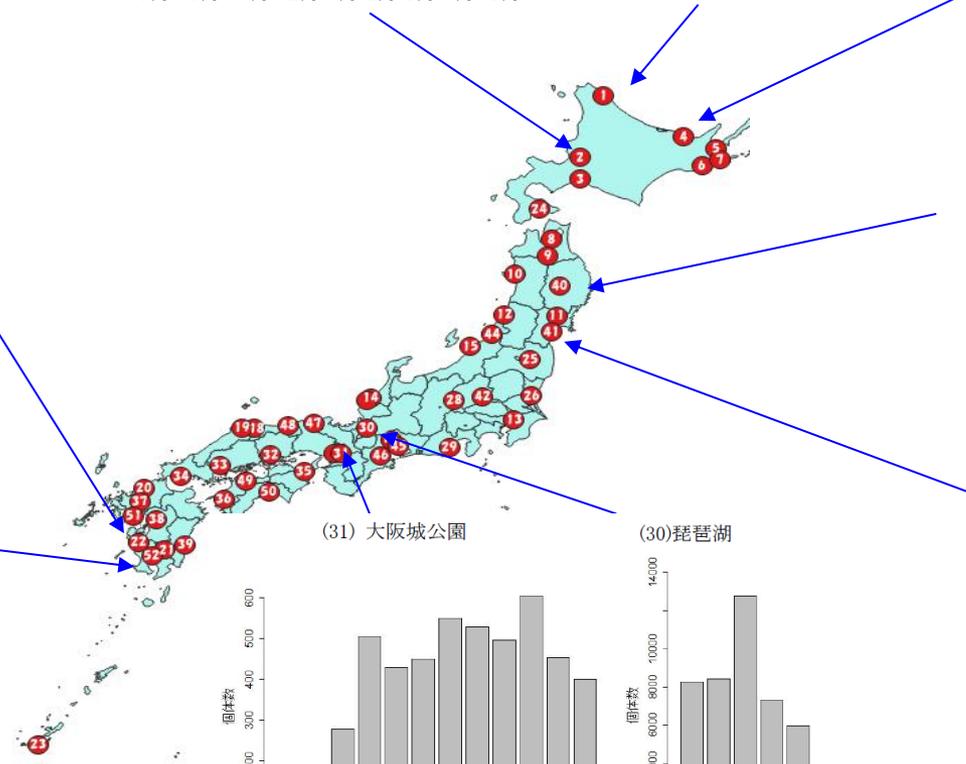
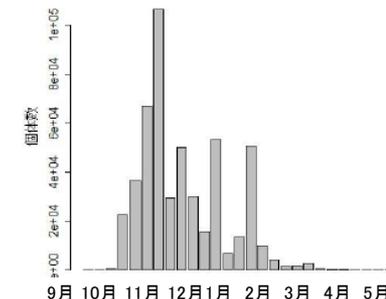
(31) 大阪城公園



(30) 琵琶湖



(11) 伊豆沼



2023～2024年シーズンの渡り鳥の状況

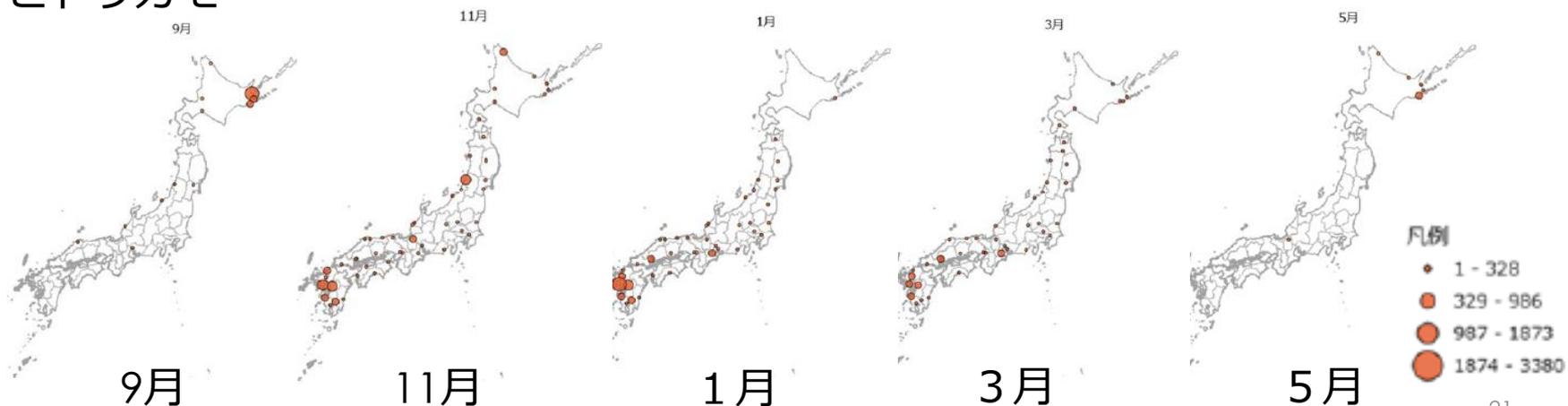
ガンカモ類の主要な渡来地における飛来状況

- 種別にガンカモ類の飛来状況を把握し、HP上で国民に情報提供した。
(例として、昨年度に陽性事例の多かったオオハクチョウとヒドリガモを掲載)

オオハクチョウ



ヒドリガモ

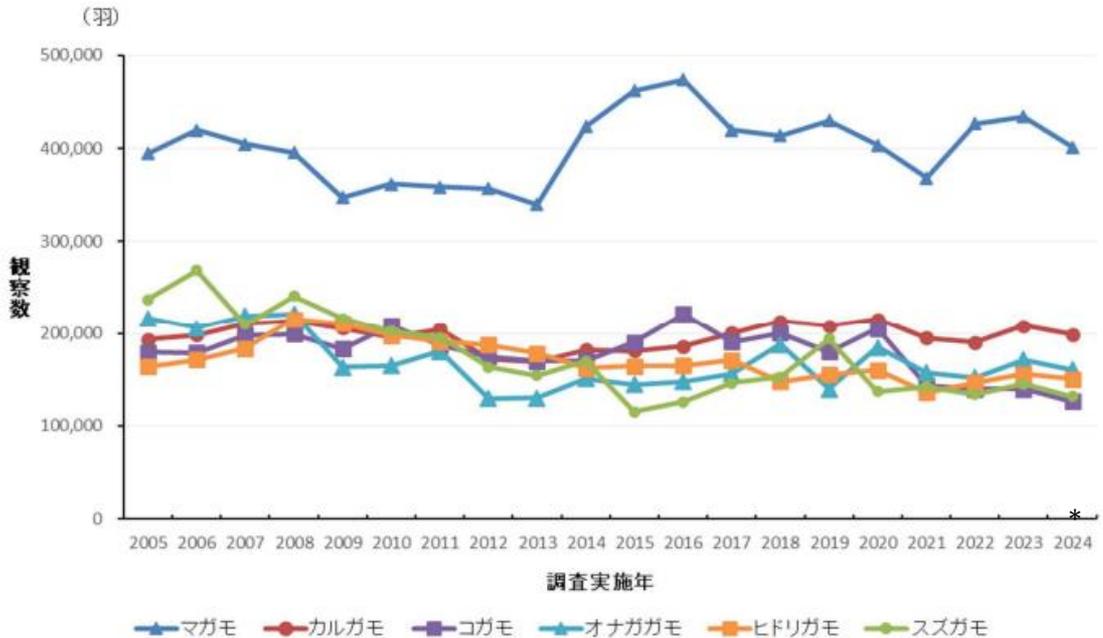


2023～2024年シーズンの渡り鳥の状況

ガンカモ類の生息調査

- 都道府県等の協力を得て、1月中旬に全国約8,600地点の湖沼等で調査を実施。
- 全地点のうち約6,400地点でガンカモ類が観察され、ハクチョウ類（4種）約7万2,600羽、ガン類（8種）約26万200羽、カモ類（32種）約159万4,400羽が観察された。
- 10年前の観察数と比べ、ハクチョウ類は約3%増加、ガン類は約40%（約7万4,500羽）増加、カモ類は約2%（約3万2,400羽）減少となった。

- カモ類のうち観察数の多い上位6種の個体数を前年と比較すると、マガモ（検査優先種2）が約8%、カルガモ（検査優先種3）が約5%、コガモ（検査優先種3）が約10%、オナガガモ（検査優先種2）が約6%、ヒドリガモ（検査優先種1）が約3%、スズガモ（検査優先種2）が約9%減少していた。



過去20年間のカモ類の種別観察数の推移

（第55回ガンカモ類の生息調査（全国一斉調査）結果（速報）より引用）

*は2024年3月18日時点の暫定値。

https://www.biodic.go.jp/gankamo/gankamo_top.html

2023～2024年シーズンのまとめと考察

■発生時期について

- シーズン初のHPAI陽性事例は、10月4日に北海道美唄市で回収されたハシブトガラス
- ☆ ハシブトガラスはHPAIVを保有する野鳥を捕食して二次感染した可能性が考えられることから、これより早期に飛来した渡り鳥によってHPAIVが国内に持ち込まれたことが考えられる。
- 過去2番目に早い発生（1番早い発生は2022～2023年シーズンの9月25日）
- シーズン最後のHPAI陽性事例は、北海道札幌市で4月30日に回収されたハシブトガラス
- ☆ 国内のウイルス侵入の早期化、蔓延の長期化傾向がみられる。

■陽性が確認された種について

- カラス類は、北海道から熊本県までの9道府県（18市町村）においてHPAI陽性を74事例確認（内、ハシブトガラス67事例、265羽）
- ☆ 広い範囲でハシブトガラスの感染が確認され、確認された地域では感染が持続する傾向がみられる。
- 国内希少野生動植物種に指定されているオジロワシ、クマタカ、ハヤブサ、タンチョウ、絶滅危惧種（絶滅危惧IA類、IB類、II類のうち、国内希少種をのぞく）に指定されているナベヅル、マナヅルでHPAI陽性を確認
- 2022～2023年シーズンに大量死が発生した鹿児島県出水市のツル類では、2023～2024年シーズンは、ナベヅル5事例、マナヅル3事例のHPAI陽性を確認
- ☆ 広い範囲で希少種の感染リスクは継続して高い状況にある。

■発生地域について

- 2022～2023年シーズンに続き、過去最多の28都道府県において、HPAI陽性事例を確認
- ☆ 野鳥におけるHPAIV感染機会の広域化傾向がみられる。

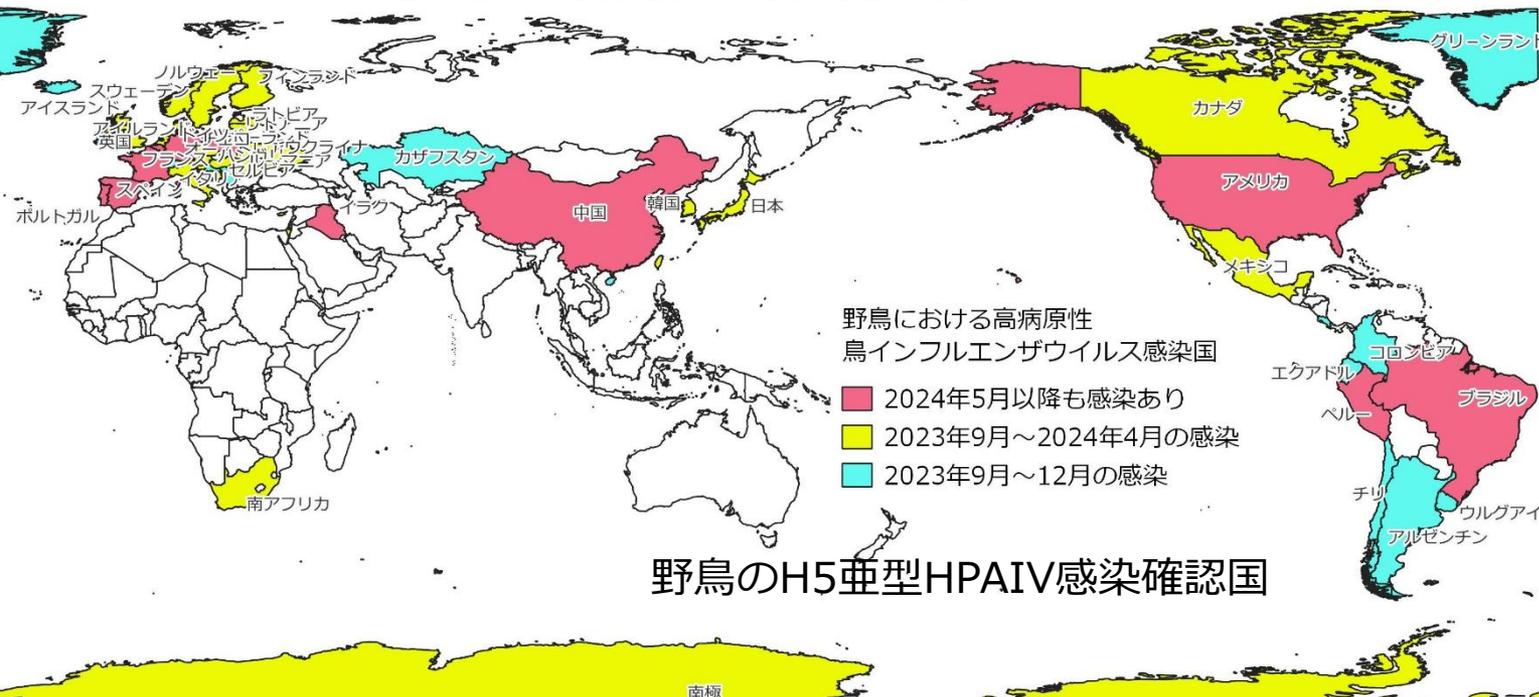
海外の発生状況

野生鳥類発生概要

地域	国/地域*数	件数	H5	H5N1	H5N5	H5N6
アジア	6	173	1	130	31	11
ヨーロッパ	30	673	7	635	31	
中東	3	12		12		
アフリカ	1	9	8	1		
北米	2	2,565	145	2,406	12	2
中南米	12	173	11	162		
合計	54	3,605	172	3,346	74	13

* 英国の海外領土や南極等、国とは別途カウントしている地域がある。

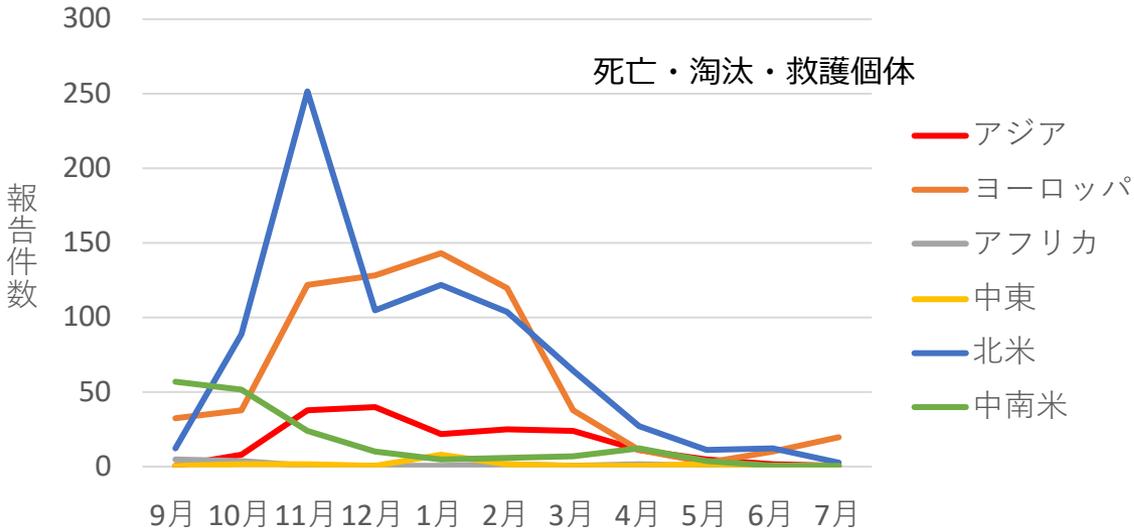
- 発生報告件数は昨シーズン（8,884件）よりも少なかった。
- 亜型はH5N1亜型が中心であったが、H5N5亜型が昨シーズンよりも増加し、日本でも初めて検出された。
- 南米の南端部から南極にかけての地域で集団死、南極で初感染確認が報告された（トウゾクカモメ類）。
- 対象期間中にロシア、モンゴルからの野鳥感染報告はなかった。



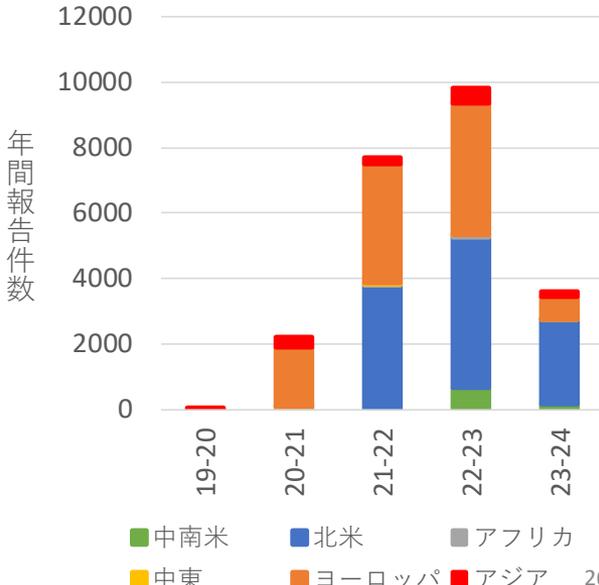
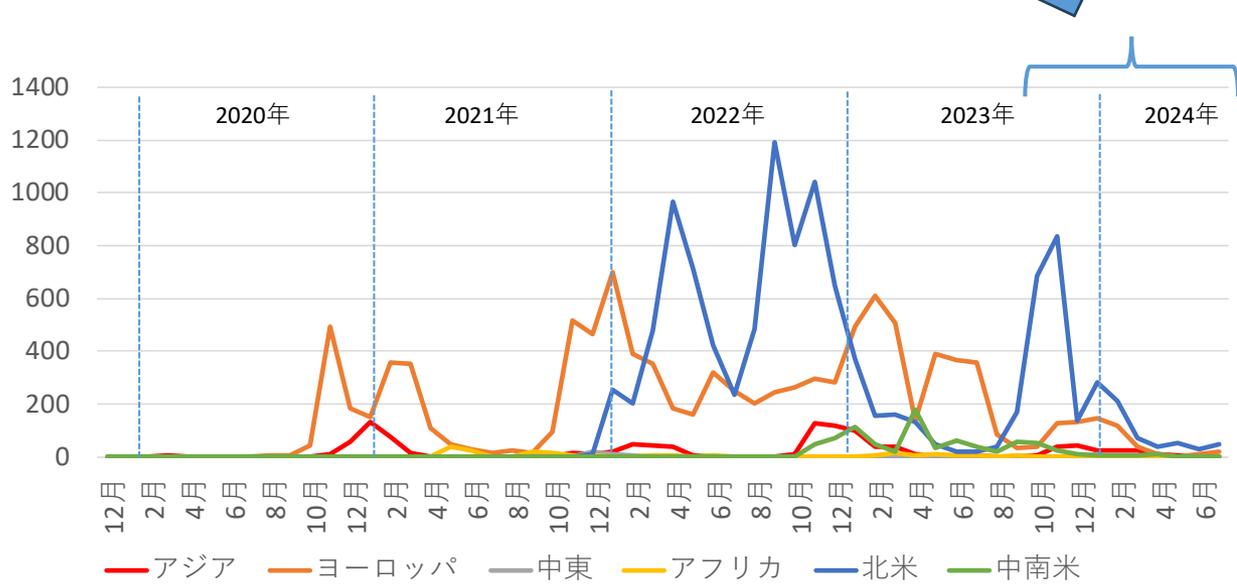
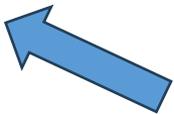
- 対象期間中に家きんではH7亜型HPAIV感染が5カ国で報告されているが、野鳥の感染は報告されなかった。

地域別報告件数

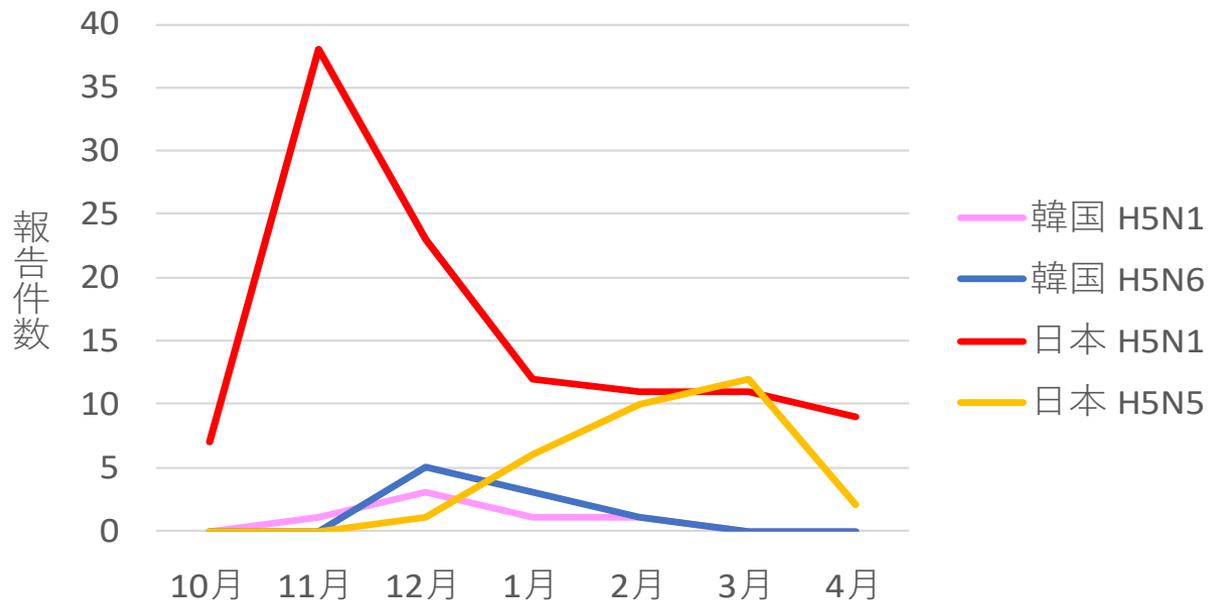
死亡・淘汰・救護個体



- 繁殖期（5～7月）の報告件数は本シーズンは少なかった。
- 報告件数は北米（うち64%はアメリカの検査捕獲）が特に多く、9月～4月頃に多かった。
- ヨーロッパ、アジアは10月～3月頃に報告が多かった。
- 中南米は2023年4月以降、感染報告件数は減少したが、11～1月に集団死があった。



地域内発生状況－日本と韓国

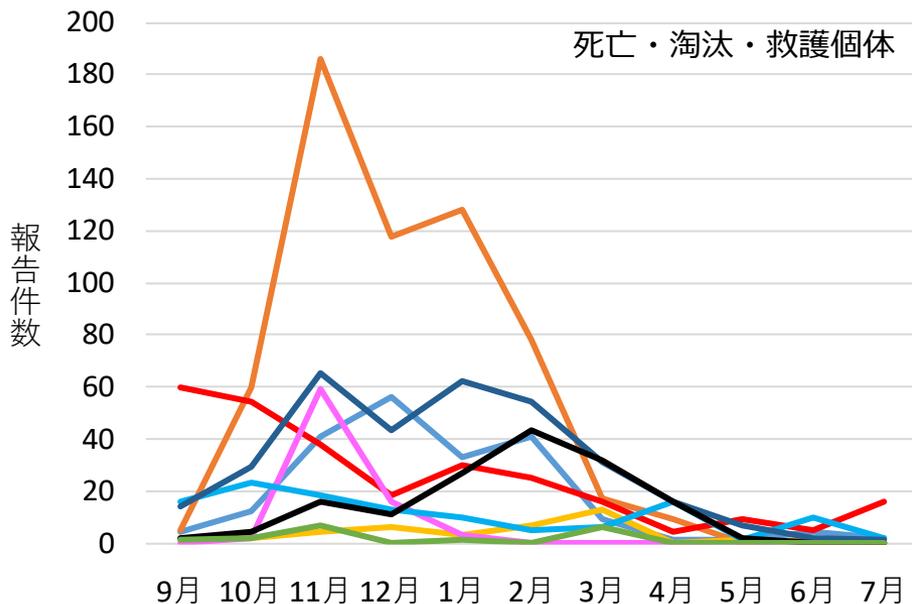


鳥の種類別報告件数

種類	日本	韓国
ハクチョウ類	19	6
ガンカモ類	15	7
カモメ類	1	0
シギチドリ類	1	0
ツル類	12	0
水鳥類	0	1
猛禽類	20	1
カラス類	75	0

- 日本と韓国の過去の発生では、原因ウイルス、発生時期が極めて良く似ていたが、本シーズンは両国間に差が見られた。
- ウイルスの亜型は、日本はH5N1亜型とH5N5亜型が中心であったのに対し、韓国ではH5N6亜型とH5N1亜型が確認された。H5N5亜型はアジア地域では日本のみで確認された。
- 韓国の発生時期は日本よりも短く、感染確認報告数も日本より少なかった。
- 韓国で感染確認されたカモ類には捕獲個体（ヒドリガモ、オシドリ）が多かった。

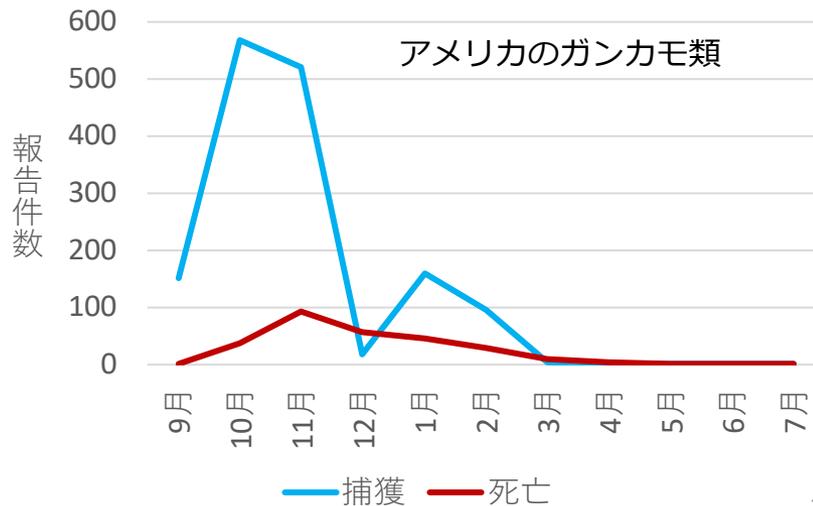
鳥の種類別発生状況



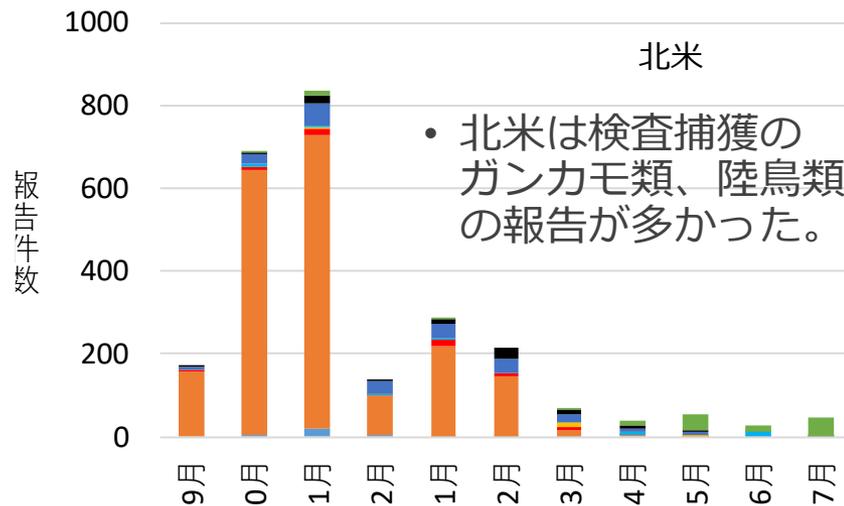
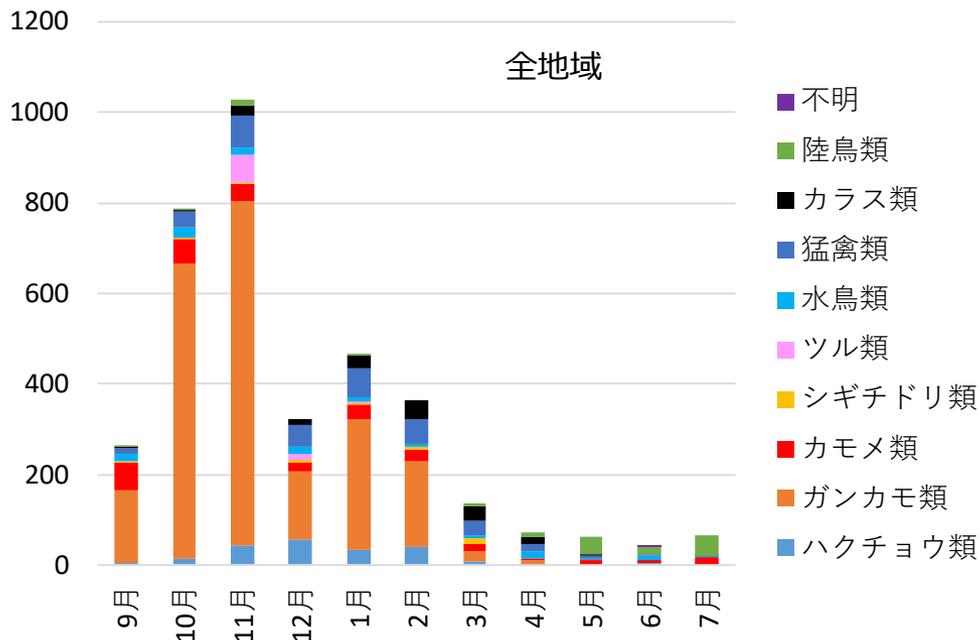
鳥の種類別報告件数 (総数)

種類	件数	割合
ハクチョウ類	207	6%
ガンカモ類	2,241	62%
カモメ類	277	8%
シギチドリ類	38	1%
ツル類	80	2%
水鳥類	122	3%
猛禽類	342	9%
カラス類	167	5%
陸鳥類	130	4%
不明	1	0%
合計	3,605	100%

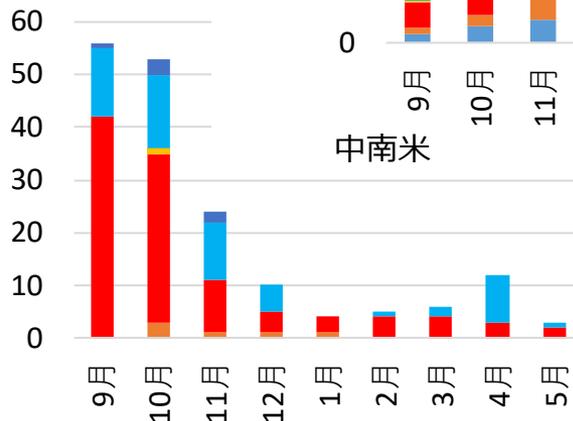
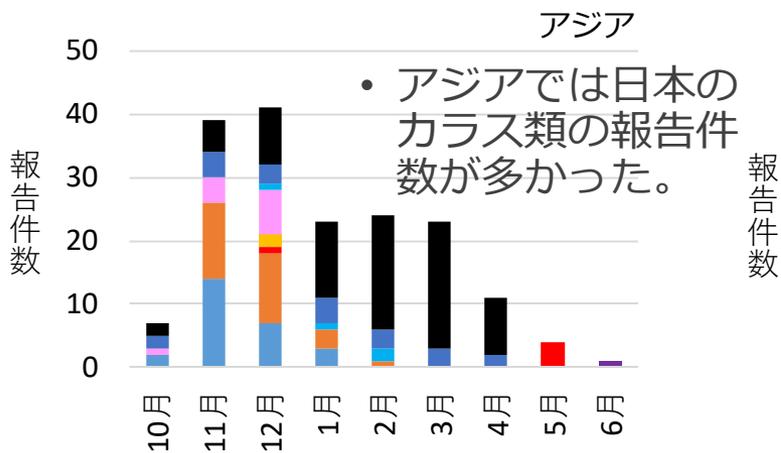
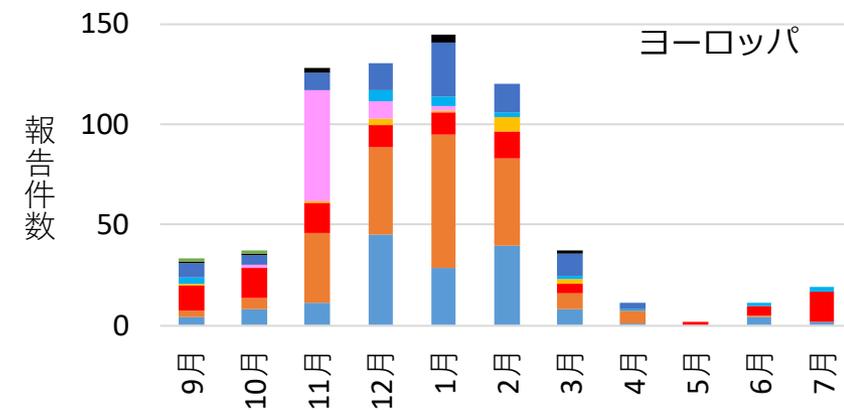
- 報告件数が多かったのはガンカモ類。その他の種類の報告件数は昨シーズンより少なかった。
- ガンカモ類の死亡報告数は昨シーズンより少なかったが、アメリカの捕獲調査による感染報告数は多かった。捕獲調査による感染確認は死亡個体の感染確認よりも早い傾向がみられた。
- アメリカで2024年4月以降、家きん及び酪農農場周辺での捕獲調査により陸鳥類の感染が多数確認された。



地域別鳥の種類内訳



- ヨーロッパ、アジアでは11-12月にツル類の感染が多数報告された。

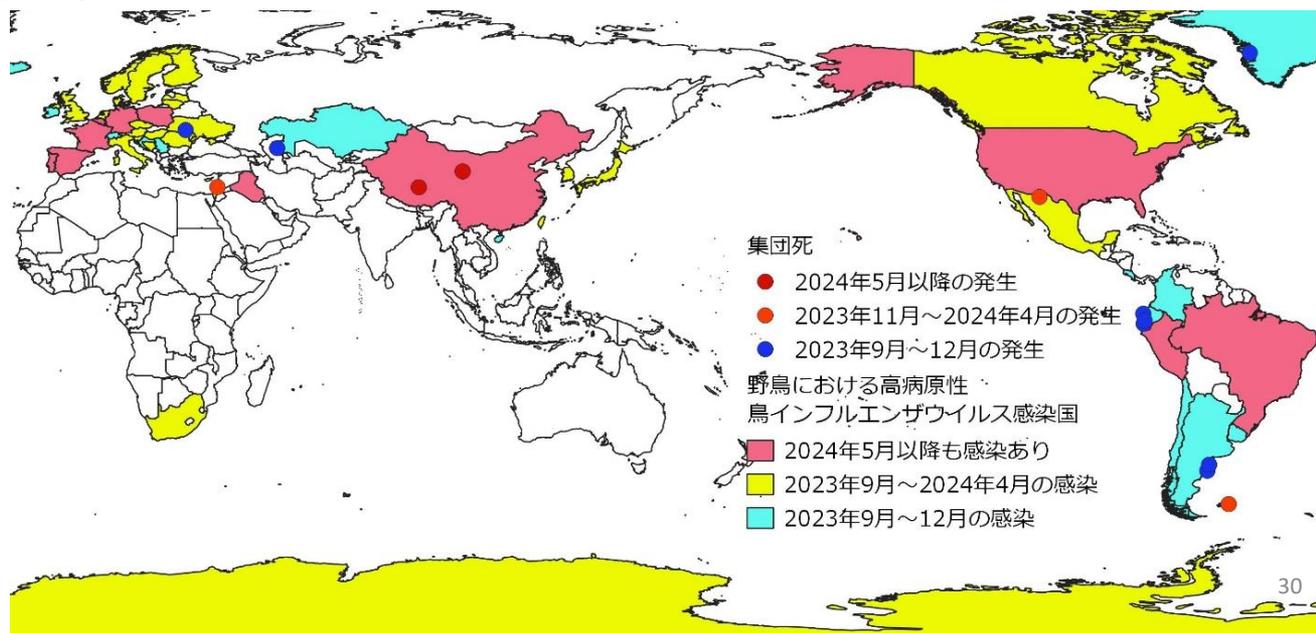


集団死事例

- 対象期間中のWOAHへの1件で100個体以上の野鳥死亡報告件数は11件で、昨シーズン（24件）よりも少なかった。
- 死亡数が多かったのはフォークランド諸島で、南極からも感染確認があったが、詳細な感染状況は不明（未調査）。
- 南米ではエクアドルやペルーでアメリカガンカンドリ等の集団死が報告された。
- アルゼンチンでは8～10月にミナミゾウアザラシやオタリアとナンベシアジサシ等、哺乳類と鳥類の同所的集団死が報告された。
- 亜型はほとんどがH5N1亜型かH5亜型であったが、6月に中国浙江省でH5N6亜型による43個体の集団死（種名不明）が報告された。

種	国	発生時期	報告個体数
チャガシラカモメ等	中国	2024年5月～7月	223
ズグロカモメ等	中国	2024年5月	275
クロヅル	イスラエル	2024年1月	350
ハクガン	メキシコ	2023年12月～ 2024年1月	100
マユグロアホウドリ ペンギン科	フォークランド諸島	2023年11～ 2024年3月	1万数千 400
アメリカガンカンドリ	ペルー	2023年12月	100
コブハクチョウ	カザフスタン	2023年12月	227
コブハクチョウ	モルドバ	2023年12月	252
オオガンカンドリ	エクアドル（北部）	2023年11月	100
アメリカガンカンドリ	エクアドル（南部）	2023年11月	6,000
オタリア	ブラジル	2023年11月	402
ミナミアメリカオットセイ			301
ミナミゾウアザラシ	アルゼンチン	2023年10月	2,570
ナンベシアジサシ			200
オタリア	アルゼンチン	2023年8～10月	717

* WOAHへ1件で100個体以上の死亡が報告されている事例。同国内で100個体以上死亡の報告のみを合算した数値。



野生哺乳類等の感染状況

海生哺乳類

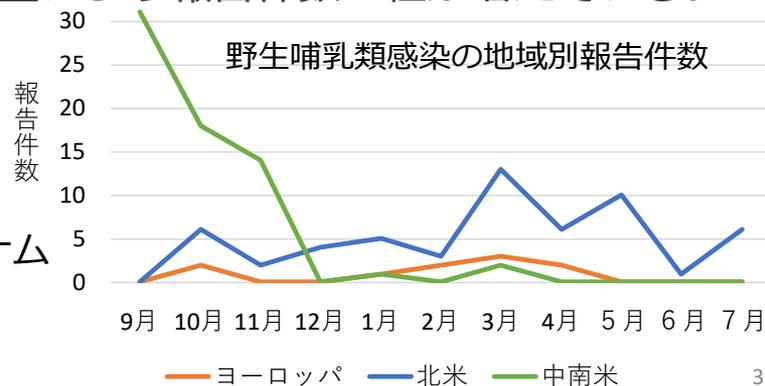
- 中南米で2023年8月～11月にH5またはH5N1亜型HPAIVによる海生哺乳類の集団死が報告された。対象期間中に以下の死亡が報告されており、実際の死亡数はこれを上回るものと推測されている。同所的にアジサシ類等の死亡が報告されている地域もある。
 - ミナミアメリカオットセイ402頭（アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル、サウスジョージア・サンドイッチ諸島）
 - オタリア1,626頭（アルゼンチン、ウルグアイ、ブラジル）
 - ミナミゾウアザラシ2,581頭（アルゼンチン、サウスジョージア・サンドイッチ諸島）
- 対象期間前の2023年6月にスバルバル諸島（ノルウェー）で死亡したセイウチからH5亜型HPAIVが検出されたことが報告された。セイウチの感染確認は初めて。
- 2023年8月にロシア（サハリン）でキタオットセイ等海生哺乳類の集団死の情報があつた。同所では7月にウミスズメ科（ウミガラス等）の集団死が報告されていた。

陸生哺乳類

- 主に北米からシマスカンク、アカギツネ、アライグマ等の感染が報告された。なお、北米では4月以降にアメリカの発生農場関連調査により報告件数・種が増えている。

ヒト

- 感染報告が継続・昨シーズンより増加している。
 - H5N6亜型：中国
 - H5N1亜型（クレード2.3.2.1c）：カンボジア、ベトナム
 - H5N2亜型：メキシコ（本亜型は初確認）
 - H5N1亜型：アメリカ（農場関係者）



アメリカの農場関連調査

- 2024年4～7月に、家きん発生農場及び酪農場における調査（捕獲を含む）で、陸鳥類及び齧歯類等からH5N1亜型HPAIVが検出された。
- 3月以降、酪農場作業員4名（3州）、家きん農場作業員9名（1州）の感染（主に結膜炎）も確認されている。

目	科	種	個体数
オポッサム形目	オポッサム科	キタオポッサム	2
齧歯目	キヌゲネズミ科	プレーリーハタネズミ	1
		ニシシカシロアシマウス	14
	ネズミ科	ハツカネズミ	83
兔形目	ウサギ科	サバクワタオウサギ	1
食肉目	ネコ科	イエネコ**	23
	イヌ科	アカギツネ**	6
	スカンク科	シマスカンク	1
	アライグマ科	アライグマ**	4

** 死亡・発症個体あり

アメリカの発生農場における調査でH5N1亜型HPAIVが検出された種

目	科	種	個体数
ハト目	ハト科	シラコバト*	6
		カワラバト*	14
		ナゲキバト*	2
スズメ目	タイランチョウ科	ニシタイランチョウ	1
	ツバメ科	ツバメ	1
	ムクドリ科	ホシムクドリ	6
	ツグミ科	コマツグミ	1
	スズメ科	イエスズメ*	68
		ヒバリヒメドリ*	1
		カタジロクロシトド	1
	ムクドリモドキ科	オオクロムクドリモドキ	1
		オナガクロムクドリモドキ	3
		ハゴロモガラス	1
ショウジョウコウカンチョウ科	ナツフウキンチョウ	1	

* H5亜型までの確認個体を含む

集計及び情報処理の方法

• 集計対象

- 2024年8月20日までに報告された高病原性鳥インフルエンザウイルス（HPAIV）感染確認事例のうち、2023年9月1日以降、2024年7月31日までに発生したものを。
- WOAH（国際獣疫事務局）への報告を基本としたが、それ以外の情報も追加した。情報源は別途示した。
- 同一箇所、同日の発生でも、種毎に1件と数えた。
- 鳥類の集計では、飼養鳥、外来種、救護センター、糞便等の環境試料（以下、飼養鳥等）は分けて集計した。
- 集計対象は、野生鳥類：3,605件、飼養鳥等：219件、哺乳類：387件であった。なお飼養鳥等については、今回は特記事項はなく、本報告に含めなかった。

• 情報の処理

- キプロス（1件）は地理的位置から中東に含めた。
- アジア地域の香港と台湾（中国）、ヨーロッパ地域のグリーンランドとフェロー諸島（デンマーク）、中南米地域のフォークランド諸島とサウスジョージア・サウスサンドウィッチ諸島（英国）はWOAHに準じて国レベルの地域として集計した。
- WOAHへの報告に発生日の報告がない事例（追加報告事例等）は、報告日等から推測した発生月を集計に用いた。
- カナダのH5Nx亜型（複数亜型感染）1件はH5亜型として集計した。

• 鳥類

- WOAHへの報告 [_WAHIS \(woah.org\)](https://www.woah.org/)
- アメリカ農務省動植物検疫局 (USDA APHIS) の2024年8月20日付け公表資料 [_HPAI Detections in Wild Birds \(usda.gov\)](https://www.usda.gov/hpai-detections-wild-birds)
- カナダ環境気候変動省等の公表資料 [_National Avian Influenza - Wild Positives \(arcgis.com\)](https://arcgis.com)
(2024年6月24日確定を最後に、以降、更新なし)
- 日本：2024年5月29日付け環境省公表資料 [_000226575.pdf \(env.go.jp\)](https://www.env.go.jp/000226575.pdf)
- 和名、分類、分布は日本鳥類目録改訂第7版の他、[_eBird \(https://ebird.org/home\)](https://ebird.org/home)、[_IOC World Bird List – Version 13.1 \(worldbirdnames.org\)](https://worldbirdnames.org/) を参考にした。

• 哺乳類

- WOAHへの報告 [_WAHIS \(woah.org\)](https://www.woah.org/)
- Empress-i (FAO) [_Empres-i \(fao.org\)](https://www.fao.org/empress-i)
- アメリカUSDA APHISの2024年8月20日付け公表資料 [_HPAI Detections in Mammals \(usda.gov\)](https://www.usda.gov/hpai-detections-mammals)
[_HPAI Confirmed Cases in Livestock | Animal and Plant Health Inspection Service \(usda.gov\)](https://www.usda.gov/hpai-confirmed-cases-livestock)
- カナダ：鳥類と同じ
- 英国：英国動植物衛生庁 (APHA) の公表資料 (WOAHへ報告なし)
[_Confirmed findings of influenza of avian origin in non-avian wildlife - GOV.UK \(www.gov.uk\)](https://www.gov.uk/government/news/confirmed-findings-of-influenza-of-avian-origin-in-non-avian-wildlife)
- WHO [_2024_july_tableh5n1226acba9-e195-4ecf-8ef7-f00a93a06420.pdf \(who.int\)](https://www.who.int/publications/m/item/2024-july-tableh5n1226acba9-e195-4ecf-8ef7-f00a93a06420)
- CDC [_H5 Bird Flu: Current Situation | Bird Flu | CDC](https://www.cdc.gov/flu/birds/)
- ProMED報告事例 (WOAHに報告のないもの) [_Home - ProMED - ProMED-mail](https://www.promedmail.org/)
- 和名、分類は世界哺乳類標準和名リスト (2021) [_日本哺乳類学会](https://www.jmcs.jp/) に準拠した。